

第46回卓球世界選手権大阪大会における応援プロジェクトに関する研究

岡澤 祥訓

(奈良教育大学・保健体育学教室)

柳沢 隆裕、森田 泰行

(奈良教育大学大学院)

A study on the project of cheering for the 46th world table tennis championships
OSAKA 2001

Yoshinori OKAZAWA

(Department of Physical Education, Nara University of Education)

Takahiro YANAGISAWA, Yasuyuki MORITA

(Graduate student, Master's Degree Program of Physical Education, Nara University of Education)

要旨：本研究は2001年4月23日から5月6日まで大阪で行われた卓球世界選手権における日本選手のメンタルをサポートするための応援プロジェクトの効果に検討を加えたものである。選手や指導者とコンタクトを取りながら4名の応援リーダーで観客をリードし応援活動を行った。その効果を16名の選手、10名の指導者に自由記述により評価させた。自由記述の文章をミーニングユニットに分け、メンタルサポート担当者、応援に参加した応援リーダー3名、大学院生1名でKJ法によって分析した。

その結果、応援によって選手のメンタルを支えることは可能であることが明らかにされた。応援方法では名前を呼ぶことが効果的であることが明らかにされた。しかし、試合の流れや選手の個性にあった応援という観点からは修正が必要な部分があったことも明らかであった。

キーワード：応援 cheering、卓球 table tennis、メンタルサポート mental support

1. はじめに

近年、スポーツは自分で行うという「する楽しみ」だけでなく、スポーツをみるという「みる楽しみ」に対する関心が高まりつつある。このような状況から、スポーツの応援行動に関する研究も行われるようになってきた。これらのスポーツの応援に関する研究は、観戦者の立場からの研究にとどまっていると考えられる(原田宗彦ら 1992; 宮田和信ら 1997; 高橋豪仁 1993; 立木宏樹・大谷善博 1999; 斉藤隆志 1991)。しかし、応援には試合時に選手がよりよいパフォーマンスを発揮できるようにするという目的もある。すなわち、試合時に選手が抱える心理的な問題に対するサポートを行うという機能が存在すると考えられる。このことに検討を加えるためには選手・指導者の立場からの研究が必要であると考えられる。

2001年4月23日から5月6日まで大阪で卓球世界選手権が行われた。岡澤はこの卓球世界選手権日本代表

チームのメンタルサポートを行っていた。サポートはシドニーオリンピックからの継続であり、選手が世界選手権で実力を発揮できるようにサポートすることが主な仕事の内容であった。このサポートの一環として、2000年の6月に神戸で行われたジャパンオープンで選手の行動を分析するために日本選手の行動をVTRで撮影していたことである。観客の殆どは日本人選手の応援をしている。選手には「失敗しても、気持ちをプラスに持ちなさい」、「マイナスに向いたとしてもプラス思考に切り替えなさい」とアドバイスしてきたが、大切な場面で日本選手が失敗すると、会場中からため息が聞こえる。選手はこのため息で自分のプレーの失敗を再確認してしまう。一生懸命応援しているからこそこのことではあるが、これではいくら選手がプラスに気持ちを切り替えようとしても難しい。自国開催の世界選手権ではこのことはもっと大きな問題になることが予測された。一般的には自国開催の国際大会では地の利を生かして有利に試合を行うことが出来ると

考えられがちであるが、観客の殆どが日本人であるため、大部分の観客から勝利を期待されることになり、大きなストレスがかかることになる。このことは、1991年に千葉で行われた卓球世界選手権での競技成績が他国で行われた世界選手権に比べて良くなかったことから明らかである。前原監督も同じことを感じていた。

そこで、大阪の世界選手権では、サッカーのサポーターや、野球の私設応援団のような組織だったプロジェクトを組み、観客が一つになって日本選手を応援することによって、選手のメンタルをサポートするということが前原監督と意見が一致した。この応援プロジェクトは、代表選手の試合での実力発揮をサポートするために、選手が失敗したときに観客がため息をつかないようにすることや、いいプレーができたときに選手を盛り上げることを目的とした。しかし、選手や指導者の立場からの応援に関する先行研究がみられないこと、日本卓球界では組織だった応援は行われてこなかったことから、応援方法は野球やサッカーなどの応援、ヨーロッパの卓球の応援方法を参考に計画することにした。

本研究においては今後の自国開催の国際大会での応援の在り方を探るために、大阪で開催される卓球世界選手権の応援プロジェクトが、選手のメンタルをサポートすることは可能であるのか、どのような応援方法が効果的であるのかを検討することにした。

2. 研究方法

応援リーダーは4名の学生に依頼し、応援パターンの作成、選手との打ち合わせを行い、応援を実施した。選手、指導者の応援プロジェクトに関する評価を得るために、大会最終日に自由記述のアンケートを実施した。実施できた人数は選手16名、指導者10名、計26名であった。

選手へのアンケート項目は、1) 今回の応援でプラスになったと感じたこと 2) 今回の応援でマイナスになったと感じたこと 3) 今回の応援の方法で有効だと感じたこと 4) 今回の応援でこれは良くない方法だと感じたこと の4項目で行い、指導者には選手へのアンケート項目の1)～4)に5) 今回の応援に関する感想を加えた計5項目で行った。

分析はメンタルサポート担当者、応援に参加した応援リーダー3名、大学院生1名で行い、自由記述の文をミーニングユニットに分け、KJ法による分析を行った。

3. 応援プロジェクトの活動内容

3. 1. 大会までの応援プロジェクトの準備に関して

2001年1月下旬に千葉県で行われたナショナルチームの合宿において、岡澤と前原監督との間で応援プロジェクトを行うことを決定した。卓球協会との交渉は前原監督が行い、具体的な応援方法の検討は岡澤が担当することにした。応援のリーダーは岡澤の研究室の大学院生に依頼することにし、応援に関する情報の収集を開始した。前原監督がヨーロッパでの応援風景に関するVTRを作成し提供した。

3月中旬に大阪卓球世界選手権の組織委員会が募集したサポーターズが約700名いるとの情報があり、前原監督、村上コーチ、田部マネージャー、岡澤メンタル担当スタッフの4人で、組織委員会においてサポーターズの代表と会い、サポーターズに応援のプロジェクトを一緒にやってもらうように依頼した。しかし、サポーターズは大会全体を盛り上げることを目的として結成されており、参加するすべての国の選手を応援するので、日本選手だけを応援することはできないということであった。そこで、サポーターズとの共同の応援はあきらめざるを得なかった。それゆえ、応援は大会当日会場に来た観客に働きかけることしかできないことになってしまった。

4月3日に第一回の検討会を行った。この検討会では、前原監督から提供されたヨーロッパの応援のビデオを参考に基本的な応援パターンの作成を行った。サーブに入る時には手拍子を早めるということである程度合意したが、選手がミスをした時にどうするのか、具体的な盛り上げかたなどが今後の課題であることが確認された。4月10日にそれぞれの応援リーダーが作成してきた応援パターンの検討を行い、応援パターンを決定した。4月17日に応援リーダー3名と岡澤が大阪で行われていた合宿会場で選手・監督・コーチに応援パターンを提示した。選手・監督・コーチから一つ一つの応援パターンについて感想・意見を聴取した。この意見を参考に応援パターンの修正を行った。具体的には手拍子と言語を組み合わせたパターンを多く考えていたが、言葉は選手の耳に入り、プレーの妨げになりうるということで、言葉はなるべく名前や頑張れといった簡単なものにするように修正する事にした。それ以降は応援の練習を行い大会に備えた。

3. 2. 大会中の応援に関して

大会期間中の応援は、基本的に観客席の最前列に応援リーダー4名が陣取り、応援をリードした。個人戦では同時刻に数カ所で試合が行われたので応援リーダーが分散し、一人で応援をリードした。試合が同時刻に4試合以上を行われた数試合は応援リーダーなしで試合が行われた。

大会初日から3日間は、応援団長のそばに岡澤がつき、「ここで押せ」「今、必要」といった指示の下に応援をした。この指示を参考にし、それ以降もそれぞれ

のリーダーが選手の癖などをできるだけ感じ取り、成功した時のみでなく、失敗したときも応援して、メンタル面を支えるよう努力した。

3. 2. 1. 観客の応援プロジェクト参加

卓球ナショナルチームの応援リーダーは、今回が初めてであり、観客に受け入れられるかどうかが大きな問題であったが、観客の応援への参加という点では成功であった。大会初日は応援リーダーの存在が認識されていなかったこと、試合が開会式終了後の午後6時からの開始であり応援に参加してくれる観客の数は少なかったが、翌日からは多くの観客が参加してくれた。多くの観客の参加を可能にした要因としては、①ピラ（資料1）、②試合前の観客とのコミュニケーション、③選手とコンタクトをとっていることが観客に伝わったことがあげられる。

ピラ：入場口で観客にピラを配布しながら日本選手の試合時間と「一緒に応援して下さい」という意図を伝えることで、応援リーダーの存在をアピールすることができ、その後の活動が行い易くなったと思われる。

観客とのコミュニケーション：試合前に、応援リーダーが観客席の最前列に立ち、観客に冗談を言って笑わせたり、応援の練習をして褒めることで観客からスムーズに声ができるようになった。また、試合中、スケッチブックに「正念場」「ため息ダメよ」などのキーワードを書いてみせ、観客を応援に集中させたり、なごませたりするように心掛けた。

選手とのコンタクト：試合に出ない選手を観客席と一緒に応援するようしてもらったり、監督から応援リーダーに「よろしく頼む」などと挨拶してもらうことで、応援プロジェクトの活動が選手からの依頼であるということが観客に伝わったと考えられる。観客にとっては選手が目にいることで写真を撮ったり、サインをもらう機会になり効果的であった。

3. 2. 2. 選手に合った応援

主な応援パターンは付表1に示された通りであった。また、応援に関する選手や指導者の評価は、応援リーダーに伝えられ、その評価に基づいて応援パターンが修正された。

4. 結果と考察

応援の効果を確認すると共に問題点を明らかにするために、選手、指導者の評価を分析した。結果は以下の通りであった。

4. 1. 選手の評価

4. 1. 1. 「今回の応援でプラスに感じたこと」に関して

分析の結果、31個のミーニングユニットが確認され

たが、その内4個のミーニングユニットがプラスに感じたこととは異なった内容に関するものであった。それゆえ、27個のミーニングユニットが分類の対象になった。また、全ての選手がひとつ以上の分類可能な内容を記述していた。

結果は図1に示されているように、多い割合を占めたのは①《マイナスの状態（不安を感じる状態）から脱することが出来た》が26%であった。これは「駄目になりそうになった時に何度も励まされた」「皆さんの応援が、不安な気持ちを消してくれた」などの意見であった。②《試合に臨みやすくなった》も26%であった。これは「良い感じで試合に臨めた」「すごく楽しくプレー出来ました」などの意見であった。③《応援が支えになった》が15%であった。これは「とても心強かった」「みんなの応援でとても勇気づけられた」などの意見であった。④《頑張ろうという気持ちを与えてくれた》は「応援によって頑張れた」などの意見、⑤《気持ちが盛り上がった》は「応援によって気持ちが盛り上がった」などの意見、そして⑥《積極的になれた》は「応援によって積極的にプレーできた」などの意見であり、これらは3つとも11%であった。

以上のように記述されている内容のほとんどが、「マイナスの状態（不安を感じる状態）から脱することが出来た」「試合に臨みやすくなった」などのメンタル面での効果に関する内容であった。これらの結果から、今回の応援は選手がマイナス思考に落ちることなく実力発揮に有効に機能したと考えられる。従って、応援プロジェクトの目的である「選手がプレーしやすい状況づくり」「選手を盛り上げる」という目的は達成されたと考えられる。

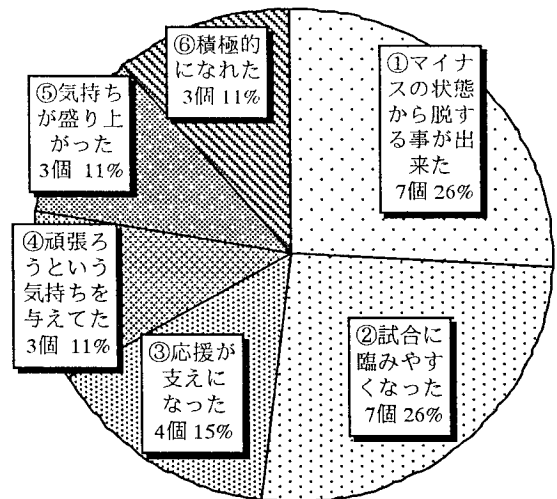


図1. 応援でプラスになったと感じたこと（選手）

4. 1. 2. 「今回の応援でマイナスになったと感じたこと」に関して

分析の結果、19個のミーニングユニットが確認されたが、その内2個のミーニングユニットがマイナスに感じたこととは異なった内容に関するものであった。それゆえ、17個のミーニングユニットが分類の対象になった。また、15名の選手がひとつ以上の分類可能な内容を記述していた。

結果は図2に示されているように、最も多い割合を占めたのは①《なし》で64%であった。次に②《緊張した、かたくなった》が24%であった。これは、“第一試合の時は逆に応援で少しかたくなりました” “最初の試合だけ慣れていない分すごく緊張した”などの意見であった。③《不安に陥る》が12%であった。これは“負けているとき多少不安になった”と“ミスの連続で応援の声が小さくなると自分で「あー」と追いつめてしまう”という意見であった。しかし、かたくなったという選手の記述には“初めは”や“慣れていない分”と記述されていることから、試合が進み、応援を受けることに慣れることによって、《緊張した、かたくなった》という状況はなくなった可能性があり、マイナス面の多くは解消できたと考えられる。しかし、負けている時、ミスが連続で出た時には自然と観客の声が小さくなるを感じている選手がいたことも事実であり、それぞれの選手の特徴を把握して個人にあった応援方法を検討することの必要性も示された。

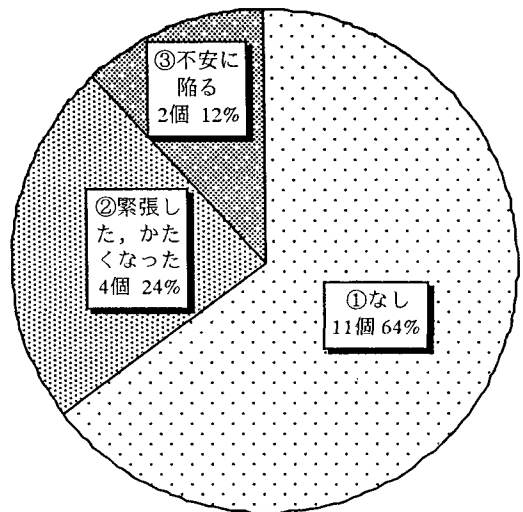


図2. 応援でマイナスになったと感じたこと (選手)

4. 1. 3. 「今回の応援の方法で有効だと感じた方法」に関して

分析の結果、21個のミーニングユニットが確認されたが、その内7個のミーニングユニットが有効な応援の方法とは異なった内容に関するものであった。それゆえ、14個のミーニングユニットが分類の対象になった。また、13名の選手がひとつ以上の分類可能な内容を記述していた。

結果は図3に示されているように、①《名前を呼ばれる》応援が有効であったという意見が最も多く、51%であった。次に②《全部》有効であったという意見が21%。③《拍手を早くしていく》などの応援が14%、④《ニッポンチャチャチャ》の応援が7%であった。⑤《なし》が7%であった。

以上のように大半の選手が“名前を呼ばれる”ことを挙げている。その具体的な理由として「親近感がわく」と記述した選手が多くいた。今回の応援では、名前だけでなくニックネームも多く用いた。このことが親近感を高めた可能性もあると考えられる。また、名前やニックネームは自分を応援してくれているという認識を高める効果があることも有効だと感じた原因であると思われる。

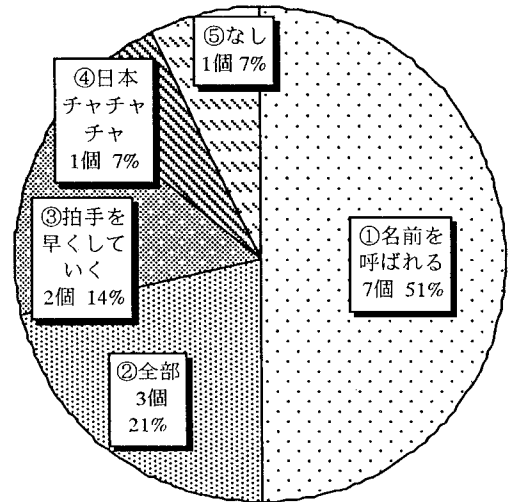


図3. 応援の方法で有効であったと感じる応援の方法 (選手)

4. 1. 4. 「今回の応援でこれは良くない方法だと感じた方法」に関して

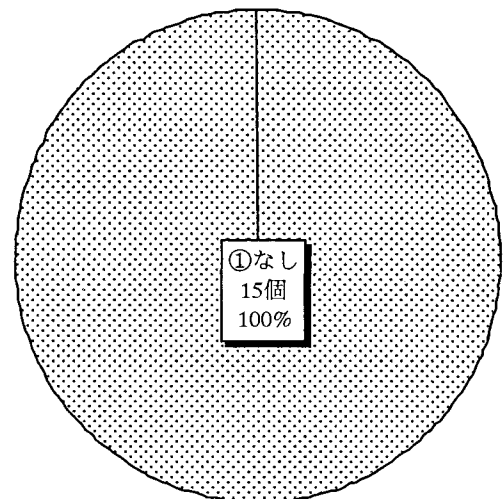


図4. 応援でこれは良くない方法だと感じた方法 (選手)

分析の結果、18個のミーニングユニットが確認されたが、その内3個のミーニングユニットが良くない応援の方法とは異なった内容に関するものであった。それゆえ、15個のミーニングユニットが分類の対象になった。また、15名の選手がひとつ以上の分類可能な内容を記述していた。

結果は図4に示されているように、全ての意見が①《なし》であった。この結果から、選手は今回の応援方法について、良くない方法はなかったと感じたことが明らかとなった。これは、事前に選手に応援パターンを評価してもらったこと、大会期間中、選手・監督からの評価を直接伝えてもらい、その評価をもとに応援方法に修正を加えたために、それぞれの選手にあった応援ができたことを示していると考えられる。

4. 2. 指導者の評価

4. 2. 1. 「今回の応援でプラスになったと感じたこと」に関して

分析の結果、21個のミーニングユニットが確認されたが、その内4個のミーニングユニットがプラスに感じたこととは異なった内容に関するものであった。それゆえ、17個のミーニングユニットが分類の対象になった。また、全ての指導者がひとつ以上の分類可能な内容を記述していた。

結果は図5に示されているように、最も多い割合を占めたのは①《選手が励まされた》で34%であった。これは“選手は励まされたと思う”や“選手にとって強い味方になったと思う”などの意見であった。次に②《積極的》が24%であった。これは“ポイントをしたときの声援は、次のプレーに入るまでの勢いにつながった”や“勝っている時にはリズムに乗れていて良かったと思う”などの意見であった。③《応援で力が発揮出来た》は12%で、これは“試合で力を出しにくい選手が、力を出せる条件を与えて頂いたと思う”“選手の集中力が持続できた（あきらめなかった）”という意見であった。④《一体感が生まれた》も12%で、これは“会場内のムードもよくなり、一体感がでたと思う”“チームに一体感を生ませた”という意見であった。⑤《今後の展望》も12%で、これは“日本の卓球選手は応援団（多くの人数）に声をかけてもらうことを待っていた”“できればこの応援を根付かせたい”という意見であった。⑥《相手選手に与える威圧感》が6%であった。これは“相手選手の焦りを感じた”という意見であった。

以上のように選手と同様、記述されている内容の多くが“励まされた”“積極的”などメンタル面に関する効果に関するものであった。今回の応援は、指導者からもメンタル面にプラスであったと評価されていることが明らかであった。

4. 2. 2. 「今回の応援でマイナスになったと感じたこと」に関して

分析の結果、16個のミーニングユニットが確認され、全てのミーニングユニットが応援でマイナスになった内容に関するものであった。また、全ての指導者がひとつ以上の分類可能な内容を記述していた。

結果は図6に示されているように、①《なし》が最も多く44%であった。②《応援の内容に関すること》が31%で、これは“さあ、これから頑張るぞといった雰囲気させる応援が欲しいものであった”“応援の言葉の長い時とかに感じるがあった”などの意見であった。③《応援が欲しいときに応援がない場合》が25%であった。

以上のように「ない」という意見が44%であったが、他の回答の多くが応援の内容や必要な時に応援がないという指摘であり、もっと応援が必要であるという評価とも考えられ、応援がマイナスの効果を生んだということではないと思われる。

4. 2. 3. 「今回の応援で有効であったと感じる応援の方法」に関して

分析の結果、18個のミーニングユニットが確認されたが、その内3個のミーニングユニットが有効な応援の方法とは異なった内容に関するものであった。それゆえ、15個のミーニングユニットが分類の対象になった。また、全ての指導者がひとつ以上の分類可能な内容を記述していた。

結果は図7に示されてように、最も多い割合を占めたのは①《名前を呼ばれる応援》で51%であった。これは“「いいぞいいぞ〇〇」で名前を呼ぶのは良かった”“名前を呼んでももらえるのは嬉しかったと思います”という意見であった。次に②《日本と呼ぶ応援》が21%であった。これは、“日本・チャチャチャはリズムがあり、選手の気分が乗れたと思う”などの意見

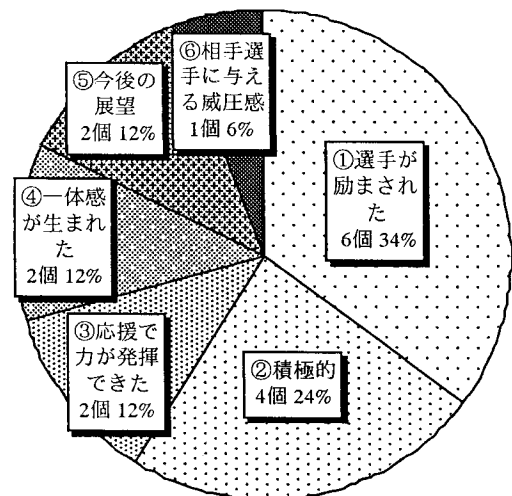


図5. 今回の応援でプラスになったと感じたこと（指導者）

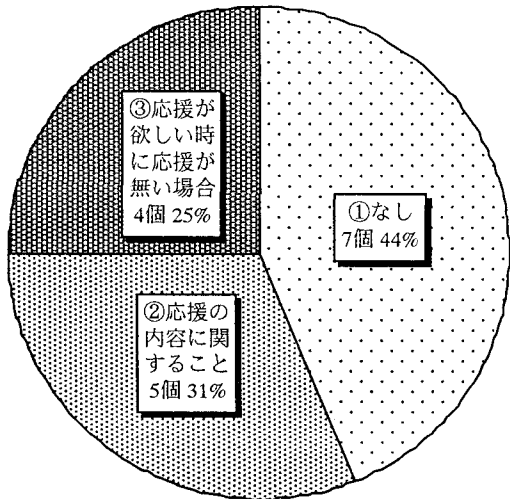


図6. 今回の応援でマイナスになったと感じたこと (指導者)

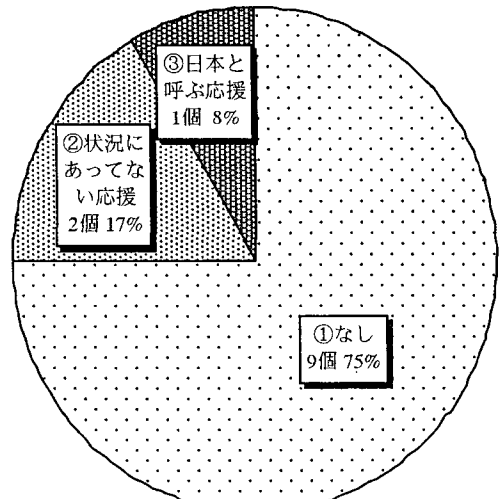


図8. 今回の応援の方法でこれは良くない方法だと感じた方法 (指導者)

であった。③《全てよし》、④《手拍子》、⑤《ガンバレガンバレの声援》⑥《なし》の3つはともに7%であった。

有効であったと感じた応援の方法について指導者も選手と同様に“名前を呼ばれる”応援が有効であったと記述している者が多い。選手、指導者共に有効な応援の方法として名前を呼ばれる方法が50%を越えており、応援では名前を呼ぶことが有効な方法であると考えられる。

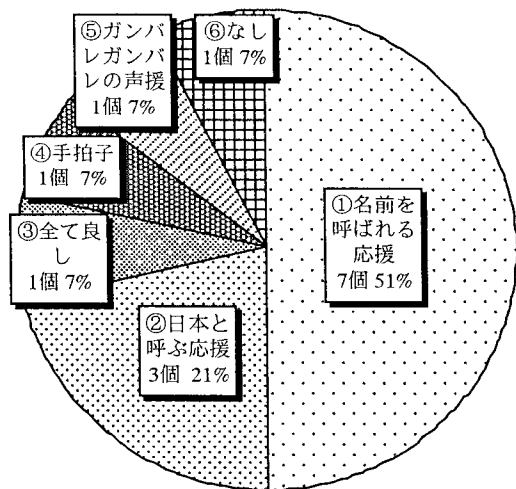


図7. 応援の方法で有効であったと感じた応援の方法 (指導者)

4. 2. 4. 「今回の応援でこれは良くないと感じた方法」に関して

分析の結果、13個のミーニングユニットが確認されたが、その内1個のミーニングユニットが良くない応援の方法とは異なった内容に関するものであった。それゆえ、12個のミーニングユニットが分類の対象になった。また、全ての指導者がひとつ以上の分類可能な内

容を記述していた。

結果は図8に示されているように、①《なし》が75%を占め最も多かった。次いで②《状況にあっていない応援》が17%であった。これは“その場の状況を見て変えていけば良いと思う”などの意見であった。③《日本と呼ぶ応援》が8%であった。これは“選手にもよるが、ガンバレガンバレ日本と応援されると、意欲が高まる人と、日本を代表していることを意識して緊張してしまう選手もいる”という意見であった。

以上のように、マイナスに感じたことに関しても良くない応援方法と同様に指導者からは“もっとこうしたほうが・・・”といった要望もとれる意見が多くみられた。卓球経験の無い応援リーグでは感じとれない試合の流れや選手の心理を理解して適した応援を行ってほしいという思いがあることが明らかであった。このことは指導者が応援で試合の流れを変えたり、積極的な攻撃を継続することができると考えていることを示しており、戦術・作戦、選手の個性を理解した応援方法を検討することの必要性を示していると思われる。

4. 2. 5. 「今回の応援に関する感想」に関して

分析の結果、34個のミーニングユニットが確認されたが、全てのミーニングユニットが応援に関する感想であった。また、全ての指導者がひとつ以上の分類可能な内容を記述していた。

結果は図9に示されているように、①《感謝》が43%で最も多かった。②《応援の効果》が21%であった。これは“応援のお陰で選手がどれだけ勇気づけられたかはかりしれません”“今大会の女子選手のメダル2個は応援のお陰と言える”などの意見であった。③《応援プロジェクトの継続希望》が18%であった。④《今後の応援に関して》が9%であった。これは“また新たに卓球の応援のやり方の見本ができたと思いま

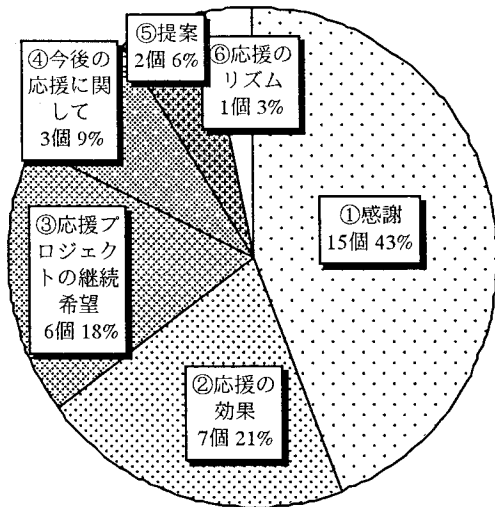


図9. 応援に関する感想 (指導者)

す” “今後の卓球の応援体型に一石を投じたのではと感じています” などの意見であった。⑤《提案》が6%であった。これは“選手がフロアに入ってきたとき、モチベーションが高まるような応援があればもっと良い” “ちょっと流行も取り入れて、若者の気を引く応援も入れてみてはどうかと思いました” という意見であった。⑥《応援のリズム》が3%であった。これは、“最初はリズムもあっていなかったが、試合が進むにつれ良くなって来た” という意見であった。

以上のように感謝の意見が多く、応援による効果、応援プロジェクトの継続希望など、応援プロジェクトの活動が日本チームに大きく貢献することができたことが明らかであった。

5. まとめ

選手・指導者から積極的な試合ができるようになったという評価やマイナス効果はなかったという評価が多く得られたことから、応援で選手のメンタルをサポートするという応援プロジェクトは有効であったと考えられる。また、大会では女子団体が18年ぶりに、女子ダブルスも26年ぶりに銅メダルを獲得し、競技成績に

も大きく貢献できたと考えられる。この競技成績に関しては、前原、近藤両監督から直接感謝の言葉をかけてもらった。応援に参加した観客からも「楽しかった」、「自分の応援が選手の勝利の原因であると感じることができた」、「学生さんが声をからして応援している姿に感動した」、「自分が選手になったみたい」などのみるスポーツとしての応援を楽しめたという内容の声をかけてもらった。応援リーダーとして活動した学生からも「観客も一緒に試合をしているような、すごい雰囲気だった。鳥肌が立つような体験をしました」、「選手がどんな気持ちでやっているのかということが感じられるようになって、自分としてはすごく成長できたと思います」などの感想を得ている。また、大会終了時には、選手、指導者が会場出口で応援団にサイン入りのラケットを応援リーダー一人一人の名前を呼んでプレゼントした。このように観客、応援リーダー、選手、指導者が一体となって卓球世界選手権大阪大会を楽しむことができた。

以上のことから自国開催の国際大会においては、今回行ったような応援プロジェクトが有効であることが明らかであった。しかし、状況や選手の個性に合った応援方法を工夫する必要性も示されており、今後検討することが必要である。

文 献

原田宗彦・藤本淳也・内海俊朗、スポーツ観戦行動に関する研究.大阪体育大学紀要23、1992、pp.39-45
 宮田和信・三島和康・野川春夫、スポーツ観戦者に関する研究.鹿屋体育大学学術紀要17、1997、pp.85-91
 高橋豪仁、スポーツ観戦についての考察.徳島文理大学 研究紀要45、1993、pp.35-47
 立木宏樹・大谷善博、スポーツ応援行動における社会的学的研究.福岡大学スポーツ科学研究29 (1・2) 1999、pp.27-36
 斉藤隆志、観戦行動の分類と要因.筑波大学体育科学系 紀要14、1991、pp.39-53

付表1 主な応援パターン

団体戦	男子の場合	女子の場合
選手がコートに入るとき	手拍子（段々はやくして）日本！	
連続得点時	いいぞ いいぞ ○○ もう一本	いいぞ いいぞ ○○
休憩・タイムアウトあけ 優勢時	○○チャチャチャ 日本チャチャチャ	○○チャチャチャ ○○チャチャチャ
タイムアウトあけ かなり劣性時	手拍子（段々はやくして）日本！	
休憩中 劣性でも行けと言うとき	○○チャチャチャ 日本チャチャチャ	○○チャチャチャ ○○チャチャチャ
セット・ゲーム奪取	○○チャチャチャ 日本チャチャチャ×2 三三七拍子	
セット奪取されたとき	頑張れ頑張れ○○	
日本チームが勝ったとき	日本チャチャチャ日本チャチャチャ （選手の名前連呼）	

個人戦	シングル	ダブルス
選手がコートに入るとき	手拍子（段々はやくして）日本！	
得点時	いいぞ いいぞ ○○	いいぞいいぞ ○○ いいぞいいぞ ●●
連続失点時	○○チャチャチャ ○○チャチャチャ（頑張れ 頑張れ ○○）	
タイムアウトあけ	○○チャチャチャ 日本チャチャチャ	○○チャチャチャ ●●チャチャチャ
	手拍子（段々はやくして）日本！	
休憩中 劣性でも行けと言うとき	○○チャチャチャ 日本チャチャチャ	○○チャチャチャ ●●チャチャチャ
セット・ゲーム奪取	○○チャチャチャ 日本チャチャチャ（いいぞいいぞ ○○）×2 三三七拍子	
セット奪取されたとき	頑張れ頑張れ○○	

○と●は選手の名前

資料1. 大会で配布したピラ

LET'S GO JAPAN!!

頑張れ、ニッポン代表！

～日本チームの応援に参加しよう～

誰でも参加可能！ みんなで日本代表をバックアップしよう!!

日本代表選手団は、皆さんの熱い声援を心から必要としています。コートで戦う選手と一体になって、エネルギッシュな応援を展開しましょう。もちろん、この会場に来ている人なら誰でも参加可能。力を貸してくれる人が多ければ多いほど、代表選手の闘志も燃え上がるでしょう。さあ、みんなの力を合わせて、メダルをひとつでも多く勝ち取ろうではありませんか！

応援方法はとってもカンタン——

今まで卓球の応援なんてしたことない、という人も絶対大丈夫。いくつかのパターンがありますが、どれもすぐわかるような簡単なものです。日本選手に得点が入ったら、係員が示すパターンに応じて拍手をしたり、選手の名前を呼んだり、ウェーブをしたり・・・といった具合です。選手の名前を知らない人でも、係員が前の方でボードを掲げるので、その名前を叫んで下さい。

決まったパターンの他にも、「がんばれ」「ファイト」「さあ一本」など試合の局面に応じて、選手に自分の熱い思いを伝えて下さい。ただし、コートの選手が構えに入りそうになったら、静かにしましょう。

点数をとられた時や、ピンチの時こそ、盛り上げよう！

代表選手はピンチになった時こそ、皆さんの応援を必要とします。選手が連続してポイントを落とした時には、みんなで励ましの拍手をして、選手をもり立てましょう。きっと、ばん回してくれるはずですよ。

そして、これだけはお願い！ 選手が失点した時に「ため息」をつくのは、選手の闘志に水を差してしまうことになるので、ゼッタイにやめてください。みんなであきらめずに応援すれば、奇跡はきっと、起こります！